

3 成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳

菊地 芳朗（福島大学）

はじめに

成塚向山1号墳の中心埋葬施設である第1主体部の木棺内からは、工具2点、武器4点の合計6点の鉄製品が出土している。決して豊富な数とはいえないが、未盗掘の埋葬施設からほぼ原位置を保って出土している点や、有機質装具にかんする多くの情報有する点などで、該期の鉄製品の研究や葬送儀礼の復元等にたいし重要な情報を提供するものといえる。そこで、ここでは成塚向山1号墳出土鉄製品から提起されるいくつかの問題について検討をおこなうことにしたい。

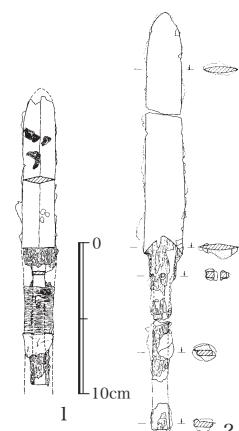
なお、筆者は、いわゆる定型化した前方後円墳の成立前に認められる墳丘をもつ墓の存在時期を「古墳時代早期」として、古墳時代の範疇でとらえる立場をとっている。ただし、早期の開始は無制限にさかのぼらせるものではなく、「纏向型」などとも総称される後円（方）部に比して小さい前方部をもつ前方後円（方）形の墳墓が日本列島の広い範囲に成立する時点をもってそれとする。また、前期の終末については各論に微妙な相違がみられるが、遺物においてはいわゆる帶金式甲冑とそれに関連する武器・武具体系の成立、古墳については大阪府百舌鳥・古市古墳群の成立とそれに関連する埋葬様式の変化（橋本2005）に代表される指標をもって中期の開始とし⁽¹⁾、それ以前を前期ととらえる立場をとる。そして、暦年代については、早期を3世紀前半中心、前期を3世紀中ごろ～4世紀後葉、中期を4世紀後葉～5世紀末と理解している。以後、この理解のもとで記述を進める。

1 成塚向山1号墳の年代

遺物による検討 成塚向山1号墳の鉄製品の内容や構成は、古墳時代前期の古墳副葬品に共通し、本古墳がこの時期に位置づけられることを物語っている。

鉄製品の組み合わせをみると、工具は長さの異なる2点の鎹であり、武器は短剣1点と槍3点である。短剣は刃部にくらべて長い茎部をもつという特徴がある。また、槍は一般的にみられる柄縁が山形を呈するものが1点もなく、すべて柄縁が一直線状を呈するものによって占められる。これらの組み合わせや特徴は、本古墳が比較的小規模な方墳であることにもとづく階層性の反映として考慮される必要もあるが、そこには一定程度の年代的属性が包含されていることも確かであろう。ただし、これら鉄製品は細かな型式変化に乏しく、個別の特徴から年代を限定することが容易でないため、それぞれの消長とその組み合わせから年代を絞り込むのが次善の方法である。

刃部にくらべて長い茎部をもつ短剣（長茎短剣）は弥生時代から存在する（田中1984：17頁）。古墳時代の例（槍をふくむ）としては、千葉県木更津市高部32号墳、広島県北広島町中出勝負峠8号墳、鳥取市美和32号墳など早期～前期前半の古墳に出土例が集中している（村上1999 図1）。これらはいずれも比較的小規模な古墳である一方、このタイプの剣が大型前方後円（方）墳に副葬された例は管見に入らない。一方、前期後葉以降には剣がしだいに長大化する傾向が早くから指摘されており、たとえば、中期前葉に位置づけられる東京都世田谷区野毛大塚古墳第1主体部では、出土した6点の剣のうち



1 広島県中出勝負峠8号墳
2 千葉県高部32号墳

図1 長茎短剣の諸例

第9章 考察

ち短剣が2点で、なおかつそれらの茎部長は身部長の2分の1にはるかに満たない。以上から、本例のような長茎短剣は、古墳時代の剣形武器としては比較的早い段階に姿を消すものとみてよいだろう。

一方、柄縁が一直線状をなす槍については、確実な早期の例をみることができない。現状で最も古い例と考えられるのは兵庫県神戸市西求女塚古墳出土のもので、前期初頭に位置づけられる⁽²⁾。ただし、このころの例はほかにはきわめて少ない。一定数の普及が認められるのは前期前葉以降で、このころに位置づけられる滋賀県東近江市雪野山古墳では、槍5点のうち4点が同タイプによって占められている。やや遅れる奈良県桜井市メスリ山古墳では、副室出土の212点以上の槍のうち95点以上が同タイプである。また、前期末の福岡県二丈町一貴山銚子塚古墳では、14点の槍のうち8点以上の同タイプがみられる。以上から、一直線柄縁の槍は前期初頭に出現して前期前葉以降に普及したとみることができる。

また、いちじるしく長い茎部をもつ鉈は、古墳時代早期までは存在を把握できないが、先述の兵庫県西求女塚古墳から出土しており、前期初頭に成立したのち普及することがうかがえる。ただし、前期をつうじて認められることから、それ以上の年代的な限定は困難である。この点はもう1点の鉈についても同様である。

表1 成塚向山1号墳と共に通する鉄製品を副葬する古墳

古墳名	所在地	墳形	規模(m)	埋葬施設
原1号墳	茨城県稻敷市	方方	32	箱形?木棺直葬
狐塚古墳	茨城県桜川市	方方	36	舟形?木棺直葬
駒形大塚古墳	栃木県那珂川町	方方	61	割竹形?木棺木炭櫛
八幡塚古墳	栃木県那珂川町	方方	55	木棺直葬
山王寺大塚古墳	栃木県藤岡町	方方	96	箱形木棺粘土櫛
朝倉2号墳	群馬県前橋市	円	23	割竹形木棺粘土櫛
前橋天神山古墳	群馬県前橋市	方円	126	割竹形木棺粘土櫛
辺田1号墳	千葉県市原市	円	33	箱形木棺直葬

※「墳形」の項目における「方円」は前方後円墳、「方方」は前方後方墳、「円」は円墳をしめす。

副葬品の組み合わせ つぎに、鉄製品以外もふくめた副葬品の組み合わせからより年代を限定するため、関東に分布する前期古墳のなかで本古墳に近似する鉄製品が副葬された古墳を参照することにしよう。該当するおもな古墳をあげると、表1のとおりである。

ただし、これら古墳のなかで本古墳の鉄製品と型式的特徴がまったく共通する鉄製品をすべてそろえる例はなく、いずれも部分的な重複にとどまっている。そのような問題もあるが、これらはすべて前期のなかにある一方で前期末に属するものはないといつてよく、前期前葉～後葉に主体があるという点で大きく共通する傾向をみせることは重要である。

そして、本古墳の鉄製品に最も近似する型式的特徴と構成をしめすのは、山王寺大塚古墳と前橋天神山古墳の副葬品である(図2)。いずれも多種多量の副葬品をもつ大型の古墳であるため、このことは当然ともいえるが、構成だけでなく型式的にも共通点が多いことは示唆的であろう。山王寺大塚古墳と前橋天神山古墳は前期後半に位置づけられることが多いが、前期前半にさかのぼらせる意見もある(田中2002:411-416頁)。たしかに、両古墳の副葬品には銅鏡や銅鏡などにおいて比較的古い要素が認められ、前期後半に限定することは逆に困難である⁽³⁾。したがって、両古墳が前期前半にさかのぼる可能性は否定できず、たとえ前期後半であるばあいでも、前半からは大きく降らない時期に該当することはほぼ疑いないと考える。このことは、本古墳の編年的位置にも大きく関連する。

小 結 以上みてきた出土鉄製品にかんする型式的特徴およびその組み合わせの検討から、成塚向山1号墳の年代をおおよそ絞り込むことができると考えられる。すなわち、剣においては前期後半以降に降らせることは難しく、槍においては前期前葉以降に位置づけられる。また、鉄製品の組み合わせは前期前葉～後葉の古墳のそれにはほぼ一致する。

したがって、鉄製品からみた本古墳の年代は、前期中ごろに近い前半とみるのが最も可能性が高く、

やや降った後半に位置づけられる可能性も残るということになる。大きくまとめれば前期中葉となるが、そのなかでもやや古い相をしめすことを強調しておきたい。前述の私見にもとづいたうえで暦年代をあてれば、3世紀末葉から4世紀初頭ということになる。

以上の理解は、本古墳出土の土器にかんする位置づけとも大きく矛盾せず（「第9章7」参照）、その蓋然性の高さを裏づけるものといえる。また、従来は困難と考えられてきた刀剣類から古墳の年代を推定する方法にたいし、個別遺物の型式学的検討およ

びその組み合わせからこれがある程度可能であることをしめした点でも、小さくない意味をもつと考えている。

2 被破壊鉄器について

事例の検討 「第4章6（1）」（120～126頁）で指摘したとおり、成塚向山1号墳から出土した2点の鉈は、意図的な破壊がくわえられたうえで副葬された可能性があると考えられた。すなわち、図86-1（120頁）は茎が「く」の字状にゆるく曲げられ、図86-2（120頁）は刃部が折り取られたとみられる。

このように、意図的に破壊されたうえで墳墓に副葬された器物の一つに、剣などが大きく曲げられた「折り曲げ鉄器」と呼ばれるものがあり、近年盛んに集成と検討が進められている（長谷川2001、清家2002、田中2006）。それによれば、折り曲げ鉄器は、①古墳時代早期から前期に集中すること、②瀬戸内と九州北部に多く、少数が近畿から東日本に分布すること、③剣（槍）と鉈で大半を占めること、④大型の前方後円（方）墳からの出土例が皆無に等しく、多くが小規模な円墳または方墳から出土すること、などが明らかにされている。また清家章は、その意義について神仙思想とのかかわりから、刀剣をはじめとする鉄器を折り曲げることで鏡と同様の役割を果たすことが意図されたと考え、げんに折り曲げ鉄器と鏡が同一埋葬施設ではほとんど共伴しないことを指摘している（清家前掲：12-17頁）。

折り曲げ鉄器にかんする以上の諸条件が本古墳の鉈にも該当することは明らかであり、したがって、本古墳においても、西日本を中心に分布する諸例と通底する思想的背景のもとで行為が実施された可能性は高いと考えられるであろう。そして、この理解が正しいとすれば、本例は東日本・関東の数少ない折り曲げ鉄器の例として新たにくわえられ、同時に前期古墳としては群馬県・北関東における初の確認例となり、重要な意味をもつことになる⁽⁴⁾。

ただし、とくに関東の前期古墳の副葬品について

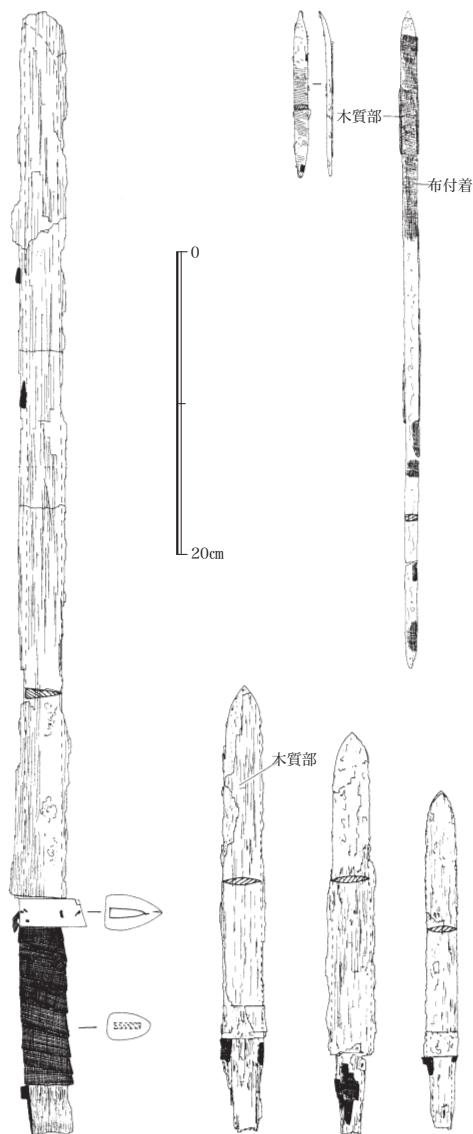


図2 栃木県山王寺大樹塚古墳（粘土桶）出土の刀剣と鉈

第9章 考察

は、比較的古い時期に埋葬施設の調査がおこなわれた例や、乱掘による例が多くを占めるため、破壊行為がおこなわれたか否かが未検討であるか、または検討不能な状況にあることから、実際にはほかにも意図的な破壊を受けた鉄製品が存在する可能性は高い。試みに、手許で引くことのできる東日本の前期古墳の報告書からその可能性が高い事例を検索すると、表2をあげることができる⁽⁵⁾。

ただし、これらはあくまでごく簡易な検索にもとづくものであり、悉皆的な集成と検討をおこなえば事例が大きく増加する可能性が高い。したがって、細かな分布や器種等については変動の余地があるが、大きな傾向を把握することは可能と考え、以下にいくつかの特徴を指摘する。

まず、厳密な意味での折り曲げ鉄器に該当するのは本古墳例と北ノ作例のみで、それ以外は刃部または茎部が折り取られたとみられることである⁽⁶⁾。後者を仮に「破断鉄器」と呼んで折り曲げ鉄器と区別

し、両者をあわせて「被破壊鉄器」と呼ぶことにしよう。分布については、東北から中部、北陸までの広い範囲にみられるが、折り曲げ鉄器が東日本に少ないという理解には大きな変更を要しない。強いていえば、東日本のなかで北関東に破断鉄器が多いという傾向が指摘できるかもしれない。折り曲げ鉄器の2例が鉗と大刀であることは西日本の器種の傾向に合致し、一方で、破断鉄器に刀剣がふくまれていないことは注目される。

被破壊鉄器が出土する古墳は前方後方墳または方墳が多く、前方後円墳が少ないと西日本と一致するものの、規模については必ずしも小規模な墳墓が多いとはいえない。ただし、折り曲げ鉄器にかぎれば、鳥越古墳をふくめた3例はいずれも長さ25m以下の小規模墳である。被破壊鉄器がすべて中心埋葬施設からの出土であることは西日本の傾向と異なるが、逆に、出土位置が被葬者の頭胸部周辺に多いことや、鏡と共に伴する例がごく少ないことは

表2 東日本における被破壊鉄器とみられる事例

遺跡名	所在地	墳形	規模(m)	位置	器種・数	副葬位置	共伴鏡数	赤色顔料	備考
大塚森古墳西櫛	宮城県加美町	円	50	主	鎌11	f	0	有	
原1号墳	茨城県稲敷市	方方	32	主	鑿1	b?	0	有	
駒形大塚古墳	栃木県那珂川町	方方	61	主	鉗1	d	1	有	
八幡塚古墳	栃木県那珂川町	方方	55	主	鉗4	b	1	有	
成塚向山1号墳	群馬県太田市	方	20×20	主	鉗2	b、d	0	有	本書
御幸田山A1号墳	群馬県渋川市	方	26×21	主	鉗1	b?	0	?	
片山1号墳	群馬県吉井町	円	51	主	鎌1、刀子1	b	0	有	
北ノ作1号墳	千葉県柏市	方方	22	主	大刀1、鉗1	f	0	?	大刀は土圧の可能性あり。
高部49号墳第1主体部	千葉県木更津市	方	11×11	主	鉗1	e	0	無	
高遠山古墳第1号棺	長野県中野市	方円	55	主	鉗1	b	0	有	
阿尾島田A1号墳第1主体部	富山県氷見市	方円	72	主	鉗1、方形刃先1	b	0	有	方墳説あり。

凡例

・「墳形」の項目における「方円」は前方後円墳、「方方」は前方後方墳、「方」は方墳、「円」は円墳をしめす。

・「位置」の項目の「主」は主要埋葬施設をしめす。

・「副葬位置」の項目は埋葬施設における被破壊鉄器の出土位置をしめす。

- a. 被葬者の東部周辺から単独で出土（表中には該当例なし）
- b. 被葬者の頭部周辺あるいは頭部上方から他の鉄器とともに出土
- c. 被葬者の胸部から出土（表中には該当例なし）
- d. 被葬者の足下から出土
- e. 被葬者の体部横から出土
- f. 棺外・墓壙内から出土

西日本に合致する。古墳の年代はすべて前期初頭以降であり、中期初頭と考えられる群馬・片山1号墳例がふくまれることから、この習俗が前期初頭ごろに東日本で受容されたのち、少なくとも中期初めまで長く続けられたことをうかがわせる。

被破壊鉄器の諸問題 以上を指摘したうえで、ここから浮かび上がるいくつかの問題について検討することにしたい。

まず、折り曲げ鉄器と破断鉄器との関係である。東日本では折り曲げ鉄器が一般的でない一方、破断鉄器が主体になるとみられ、鉄器を破壊することにたいする思想や方法が異なることが考えられる。それにたいし、本古墳は両鉄器とともに出土する数少ない東日本の前期古墳の一つであり、両者の関連が皆無ではないことを推測させる意味で重要な位置を占める。ただし、とくに破断鉄器については、その認識が十分でないことや、副葬後の鋸化等による破損との区別が必ずしも容易でないことなどから、集成と検討は全国的に未着手といってよく、現在のところ分布や消長は不明といわざるをえない。したがって、今後はこの点に留意しつつ、集成を進めたりと、その意義等について検討していく必要があり、ここでは、前期の東日本に折り曲げ以外の鉄器破壊行為が広汎に存在した可能性が高いことを指摘しておくにとどめたい。

つぎに、本古墳には鉈とともに剣と槍が副葬されながら、これらには特段の破壊痕跡が認められないことが注意される。すなわちこれは、同一埋葬施設に副葬された各種鉄製品のなかで、破壊される器種に選択がおこなわれたことを意味しよう。清家章は、刀剣でなく工具や鉄鎌が折り曲げられることを、神仙思想や儀礼の変容としてとらえようとするが（清家前掲：14頁）、本古墳のような例についてはとくに言及がない。背景にある思想や儀礼の変容はありうることと思われるものの、被破壊鉄器の意義に総体的に迫るために、刀剣が同時に副葬されながら工具があえて折り曲げられることにたいする整合的な説明が必要であろう。今このことを詳細に検討す

る用意はないが、すべての折り曲げ鉄器（あるいは破断鉄器）を鏡との関連で解釈するのではなく、それとは異なる思想や儀礼が存在していた可能性も考慮すべきであるように思われる。そして、この考究のためには、折り曲げられる器種それぞれにたいする年代、分布、出土位置等のより詳細な分析が必要である。

また、被破壊鉄器にかんしては、破壊された土器・玉・鏡等の器物が古墳に副葬（供献）される事例との関係という問題がある。清家は、折り曲げ鉄器とこれらとの分布のずれから、その関連に消極的評価を与えている（清家前掲：11-12頁）。たしかに、東日本でみても、被破壊鉄器と他の器物破壊が同一の遺構で認められる例はなく、これらを積極的に関連づけることには慎重にならざるをえない。しかし、たとえば早～前期の東京湾東岸には、ガラス小玉の破碎儀礼がみられる市原市神門4号墳、破鏡・破碎鏡・破断鉄器が出土した木更津市高部古墳群、折り曲げ鉄器が出土した木更津市鳥越古墳など、各種器物破壊の事例が集中的に認められ、詳細に検討すれば、同様の現象は他の地域でも把握できることが予想される。

すなわち、被破壊鉄器と他の器物破壊は、同一古墳・遺構という点でみればそれほど密接ではないものの、同時期の特定地域という点でみれば共存する事例が決して少なくないと考えられるのである。したがって、これら各種器物破壊を相互にまったく無関係とみなすことも逆に困難ではないか。この現象の背景には、微細な時間差、器物の入手ルートの相違、被葬者の階層差、導入される思想や儀礼の相違、といったいくつかの要因が想定できるが、現時点でこれを特定することは容易でない。事例の集成とともにそれぞれの要素の抽出と比較が、器物の破壊儀礼を体系的に解明するための手がかりになると考えられよう。

小 結 成塚向山1号墳出土の鉈が被破壊鉄器であるとの認識から、いくつかの憶見を述べた。新たに指摘した点はほとんどないものの、折り曲げ

鉄器や被破壊鉄器なお検討すべき課題が少なくなることを確認した。とくに、破断鉄器は未検討の状態といってよく、被破壊鉄器と鏡や土器などの他の器物破壊との関係にも不明な点が多い。まずは個別の器物破壊の事例集成と検討が不可欠であるが、本古墳や先の東京湾東岸の諸例からうかがわれるとおり、折り曲げ鉄器をはじめとする特定の器物破壊の検討のみでは、そこでおこなわれた儀礼の実態と本質には必ずしも十分に迫れない恐れがある。したがって、各器物破壊にたいする研究成果の比較対照が重要な意味をもつと考えられ、ひいてはこのことが、古墳でおこなわれた各種儀礼にかんする研究を前進させることにつながる。

また、繰り返しになるが、本古墳は、東日本における数少ない折り曲げ鉄器出土古墳の一つであり、なおかつ西日本の折り曲げ鉄器出土古墳の特徴ともほぼ合致し、一方で、折り曲げ鉄器と破断鉄器が共伴するといった特徴的な様相をもしめしている。これらのあり方は、本古墳の被葬者の性格や築造背景に迫るために重要な鍵になると考えられる。

3 槍の消滅とその意味

一直線柄縁槍の消長 本古墳で出土した柄縁が一直線状となる槍（以下「一直線柄縁槍」と称する）が、槍のなかではやや遅れた古墳時代前期初頭に出現し、前期をつうじ盛行することは、さきに述べたとおりである。まず、このタイプの槍の中期の例を概観し、その後の動向をみておきたい。

中期前葉の東京都野毛大塚古墳第3主体部では、13点出土した槍がすべてこのタイプのものである。ただし、そのほとんどは4枚合わせ技法を採用しつつも柄縁がほぼ関に対応する位置にあり、これが身の部分に大きく張り出していた前期の槍の構造から変化をみせている（図3-1～3）。ほぼ同じ時期の大坂府豊中大塚古墳第2主体部東櫛でも、3点の槍のうち少なくとも1点は一直線柄縁で、なおかつ同様に柄縁がほぼ関の位置にある（図3-4～5）。また、中期中葉とみられる奈良県宇陀市後出

7号墳からも同様の槍が2点出土しているが、中期中葉以後になるとこのタイプの槍を認めることがきわめて難しくなる。

以上から、一直線柄縁槍の構造の変化は広い地域で連動するものであり、さらにこの変化が中期に入るところ起きたことが判明する。言い換えれば、前期の槍にみられた構造上の強い規格性が、中期に入ると急速に崩れたとみられるのである。そして、一直線柄縁槍は決して中期の長柄武器の主体となることはなく、中期中葉にはほぼ姿を消すことになる。

山形柄縁槍と一直線柄縁槍 上記のような一直線柄縁槍の構造変化と消長は、槍の主体をなす山形の柄縁をもつ槍（以後「山形柄縁槍」と称する）のそれとも密接なかかわりをもつ。すなわち、中期に入ると、山形柄縁槍も同様に急速に衰退し、かぎられた出土数に転じるのである。たとえば、さきの東京都野毛大塚古墳では、中心埋葬およびその付属施設とみられる第1・第3主体部に確実な山形柄縁槍がふくまれず、中期中葉ごろの第4主体部から1点が出土したに過ぎないうえ、それは前期の山形柄縁槍とは大きく異なる形態となっている（図4-1）。

このように、中期における槍のあり方は、槍の生産全体において、ひいては当時の武装とも不可分にかかわる広範かつ構造的な変化の反映とみられるのである。

ひるがえって、槍の柄縁の一直線状と山形という形態の違いは、何に起因するのだろうか。そもそも成立当初の槍の柄縁が山形であることが機能的な要請とは考えにくく、古墳時代早期において所有者の階層性をしめす器物として槍が定型化する過程で考案されたものとみるのが妥当である⁽⁷⁾。そして、前期初頭に遅れて現れる一直線柄縁槍は、柄縁を山形に削り出す工程の前段階をそのまま製品にしたものと理解でき（菊地 1996：61頁）、したがって、山形柄縁槍の簡略型と考えられるであろう⁽⁸⁾。

この理解が正しいとすれば、一直線柄縁槍は山形柄縁槍よりやや低いランクに位置づけられていた可能性が考えられることになる。ただし、両者は大型

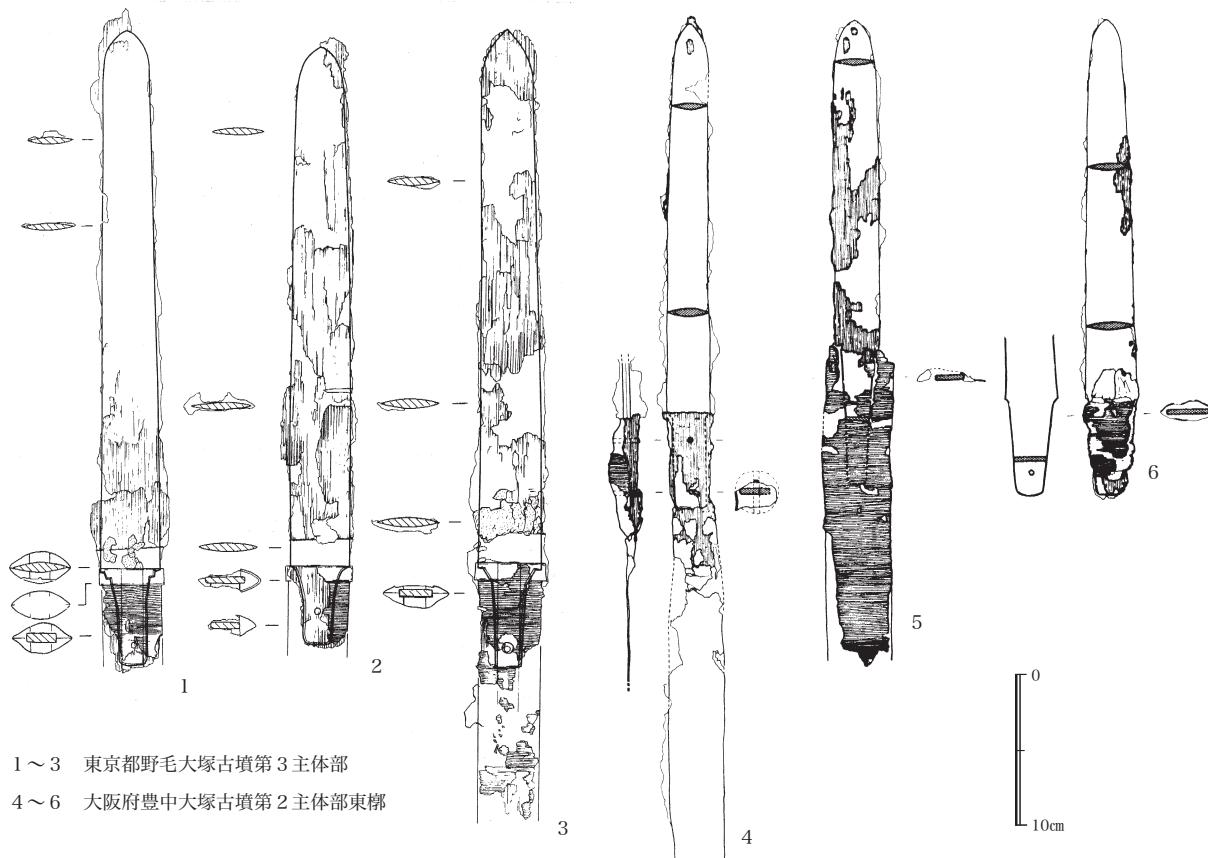
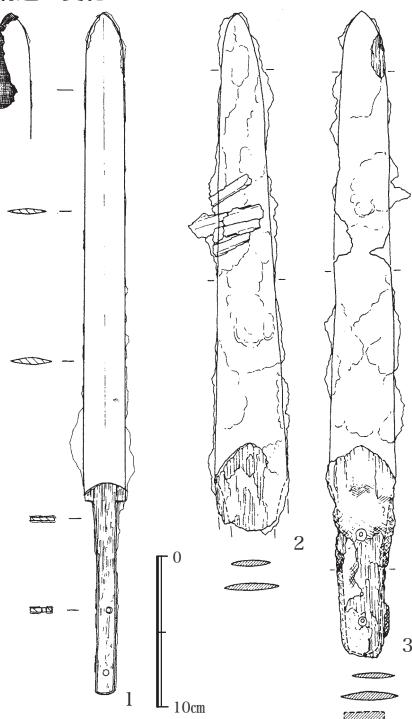


図3 古墳時代中期における槍の柄構造の変化

古墳で共伴する例も少なくないよう、古墳規模や副葬品構成に応じて整然と区別されるものではない。したがって、両者のランクの差とは決して厳密なものではなく、古墳規模や地域等にゆるやかに対応する程度の差であったとみるのが相当である⁽⁹⁾。そして、前期初頭以後、両者は長く併存することから、槍の保有形態（柄形態と副葬数）によってしめされたゆるやかな階層性が各地のエリート間に形成されていた可能性が考えられる。

そして、古墳出土例からみるかぎり、このような槍のつくり分けやそれにもとづく階層性が、中期初頭にいたって否定される方向に転じたことをしめしている。ただし、中期前半では野毛大塚古墳などで槍が一定数出土していることがしめすとおり、槍の実用的役割はなお継続しており、これがほぼ解消されたのが中期中葉と理解できよう。

一方で、山形柄縁槍が一直線柄縁槍と異なるのは、中期中葉以降もわずかながら生産が継続する点であ



1 東京都野毛大塚古墳第4主体部
2・3 大阪府高井田山古墳

図4 関連する槍

る。たとえば、中期後～末葉に位置づけられる大阪府柏原市高井田山古墳では、少なくとも4点の山形柄縁槍が出土している（図4-2・3）。高井田山古墳の副葬品構成は必ずしも中期後半の古墳副葬品の典型とはいえないが⁽¹⁰⁾、山形柄縁槍が中期後半まで存続していたことをしめす意味で重要である。

これに関連して注目されるのが、これまでみてきた有機質製装具と形態が類似する鉄製柄縁装具を着装する槍（以後「鉄装槍」と称する）である。これは、千葉県君津市八重原1号墳、石川県加賀市狐塚古墳、奈良県宇陀市後出3号墳、香川県さぬき市川上古墳、岡山県倉敷市天狗山古墳などから出土している（図5）。これら古墳はいずれも中期後半に位置づけられるとともに鉄製甲冑を副葬する点で共通し、鉄装槍が上位階層に保持される器物であったことを如実にしめしている⁽¹¹⁾。ただし、鉄装という最新の技術が導入されながら、機能的にさほど意味があるとは考えにくい山形柄縁が採用され、さらに鉄装槍そのものの出土例がごく限定されていることは、中期（とくに後半）における槍が所有者の武威をしめす象徴的器物に転化し、さらに、山形柄縁槍を所持するこ

とがその人物の高い地位をしめすという伝統的意識がエリート間に共有されていたことを物語っている⁽¹²⁾。

槍の展開と消滅 以上みた諸動向から、古墳時代の槍の変遷をいくつかの過程にまとめることが可能となった。

最初は、早期における山形柄縁槍の出現である。このなかでは柄への糸巻きが柄縁先端までおよばないものが早く出現し（豊島2003）、やや遅れて柄縁先端まで糸を巻いたより丁寧なつくりの槍が現れ、以後の山形柄縁槍の主体となる。山形柄縁槍は弥生時代に明確な系譜を追えず、汎列島規模の政治的ネットワークの形成にともない、これを表象する器物としてこの時期新たに創出され、各地のエリートに共有された可能性が高い。また、その成立にあたっては、長兵が主体である朝鮮半島との交流から影響を受けた可能性も十分考えられる（村上1999）。

つぎは、前期初頭における一直線柄縁槍の出現である。これは、前段階に成立したエリート間の政治的交流がさらに大規模化・定型化してゆくなかで、槍を大量に生産する必要が生じた結果、製作工程を

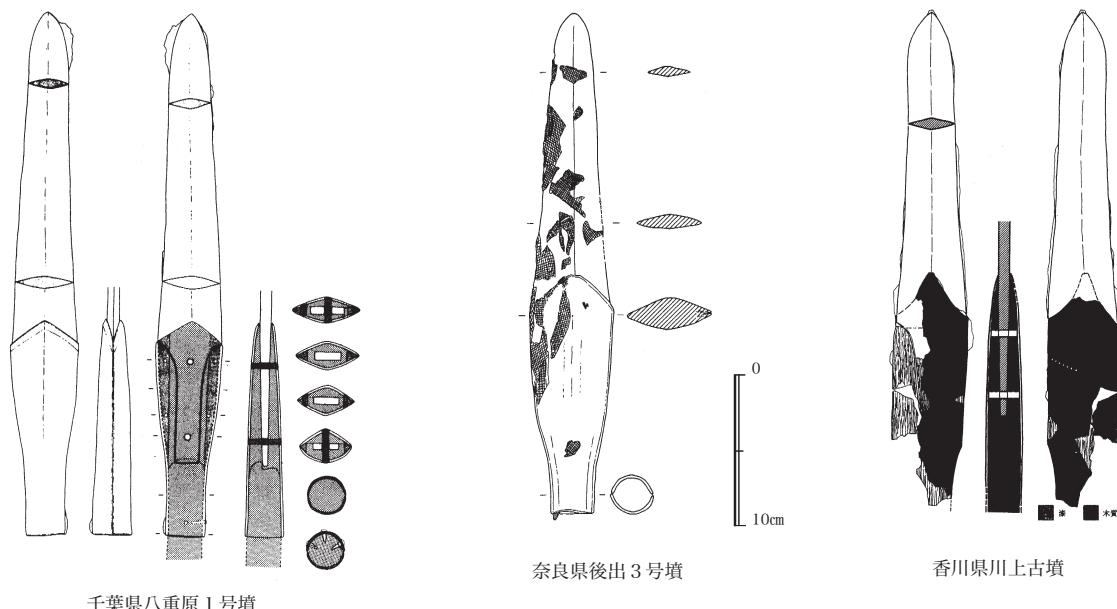


図5 鉄装槍の諸例

省略することで成立したものと考えられる。これにより、山形柄縁槍と一直線柄縁槍（あるいは弧状柄縁槍）のあいだに不分明ながらも優劣の関係が生じ、それらの保有形態によるゆるやかな階層性が前期のエリート間に形成されたことが考えられる。ただし、一直線柄縁槍の普及は前期前葉以降であり、その階層性は前期をつうじしだいに整えられていったとみるべきである。

そして、前期はまさに槍の全盛期であり、多数の槍を副葬する近畿中央部の巨大前方後円墳から、1点の副葬にとどまる小古墳まで、多様な槍保有のあり方が各地の古墳に認められることになる。なお、前期のなかでさらに細かく槍の変化を追える可能性があるが、今回は槍の消長における大きな変遷の過程を把握することに主眼を置いたため、細別はおこなわない。

つぎは、中期初頭における槍の構造変化と衰退である。それまで一貫してきた柄縁を身に位置させる槍から、柄縁が関とほぼ同位置または近い位置にある槍が主体となる一方で、槍の副葬数が大きく減少する。構造の変化を生産上の技術革新の結果とみる解釈もありえようが、これが槍の増加と結びついでないことは、少なくとも武器としての機能を向上させる変化でないことを物語っている。のちの動向からみて、実用武器としての槍を否定する動きのはじまりであることは疑いなく、ひいては前期までの槍の生産状況や背後の政治・軍事組織の変動をも背景にした現象である可能性が高い。

つぎは、中期中葉における槍の実質的消滅である。一直線柄縁槍はこの時点では姿を消し、山形柄縁槍はわずかに存続するものもはや実戦上での役割は消失し、所有者の権威や武威をしめす象徴的器物に転化したものとなる。これを象徴するのが、この時期新たに現れる鉄装槍である。このような変化が、当ときわめて活発であった朝鮮半島との政治的・軍事的交流を背景にしたことは確実であろう。また、同じころ現れる多角形袋式鉾も、鉄装槍と同様の背景のもとで各地の有力古墳に副葬されたとみられる

（高田 1998）。

そして最後は、中期末における槍の消滅である。伝統的な武威や権威の象徴としてわずかに存続してきた槍は、この時点をもって姿を消すことになる。なお、これとほぼ時を同じくして、把持する武器である剣も副葬品構成からはずれ、後期以後はごく少数が認められるのみとなる。また、鉾についても、中期までの主体であった剣形刃部をもつものが激減し、新たに刃部横断面が三角形を呈するものが現れる一方で、鉾を副葬する古墳そのものがかぎられることとなる。また、この変化は中期を代表する武具であった鉄製短甲の消滅とも軌を一にしている。つまり、中期末における変化は、ひとり槍の消滅にとどまるものではなく、当時の武器や武装の大きな転換と連動した現象なのである。

小 結 以上、古墳時代前半期の主要武器である槍の消長とその背景についてみてきた。槍は早期に確実な例が現れ、中期末に姿を消すまでのほぼ300年間存続するが、上述のとおり、その間にいくつかの画期となる事象をはさみつつ展開する。また、早期および中期の槍は出土数がかぎられ、主力武器として役割を發揮したのは前期を中心とする100年あまりとみられる。

注目されるのは、槍がたんに倭の主要な武器として変遷を重ねただけでなく、倭のエリート間の政治的関係や武威をしめす象徴的器物としての側面を大きく担ったことである。すなわち、早期にはいち早く定型化した槍が各地の有力古墳に限定的に副葬され、前期には大量に生産されて古墳の階層性を最も顕著に反映する器物となる。中期に入ると副葬数は激減するものの短期間では姿を消さず、構造や形態を変化させつつ各地の有力古墳への副葬が中期末まで継続する。このようなあり方は、槍の保有が古墳時代中期までのエリート層の権力表示や維持に重要な役割を果たしたことをしめし、ひいては、倭の中央政権にとって槍の生産と配布をつかさどることが、政治的に小さからぬ意味をもっていたことを表わすものであろう。

また、中期末における槍の消滅は、他の武器や武具の消長とも密接に関連することから、たんに特定武器の終了にとどまらない重要な意味をもつと考えられた。すなわちこのことは、直接的には接近戦用武器の主体として名実ともに大刀に交替するという武装や戦闘方法の変化をしめすものであるが、より重要かつ本質的な意味は、中期までの倭のエリートの伝統的武器にたいする思想の終焉と、その背景となつた倭の政治的・社会的変動の発生として評価することができるのである。

4 成塚向山1号墳の被葬者の性格

刀剣類副葬古墳の実態 東日本では刀剣類が副葬される前期古墳が少なくないが、多くは剣1点あるいは槍1点、または両者1点程度の副葬数であり、3点以上が副葬される例はごく限定される。そこで、本古墳と同様の4点以上の刀剣類が副葬された東日本の前期古墳を表3にあげ⁽¹³⁾、副葬された鉄製品から本古墳の被葬者の性格に迫る手がかりをえることにしたい。

この表から指摘されることの第一は、該当する古墳の大半が墳長50mを超える大型の前方後円（方）墳であるという事実である。このことは、東日本で3～4点以上の刀剣類を副葬する前期古墳のほとんどが地域を代表する有力古墳であり、墳形および規模と刀剣類の種類および副葬数が相関していることを明白にしめしている。

ただし、より詳細にみれば、東日本では能登や駿河・遠江など西日本寄りの地域に、比較的規模が劣るにもかかわらず多数の刀剣類が副葬される古墳が分布する傾向が指摘できるようである。したがって、古墳の墳形と規模にくわえ、その所在地域も副葬刀剣類の実態を復元するための重要な要素であり、副葬刀剣類が複数の要因のもとで流通していたことをうかがわせる意味で、表のしめす内容は重要である。

その第二は、上記の一方で、このなかに少数ではあるが本古墳をはじめ中小規模の古墳がふくまれてることである。ただし、そこには規模は劣るもの

のいわゆる首長墓と認めてよい古墳がある。すなわち、千葉県辻田1号墳は、神門古墳群後の市原地域における最大規模の前期古墳であることが判明しており（田中2002：389頁）、前方後円墳を築造しえなかつた地域のエリート墓の一様相として理解することが可能である。また、細かな検討は省略するが、群馬県朝倉2号墳についても同様の理解が可能と考えられる。

一方、本古墳については、至近の位置に墳長約60mの前方後方墳である寺山古墳が所在し、その位置づけによって本古墳の評価が大きく左右される。ただし、寺山古墳は現在のところ墳形以外の情報がほとんどなく、年代の限定は困難といわざるをえない。この問題については、のちに改めて検討する。

その第三は、このなかに早期の古墳がふくまれないことである。早期において古墳に副葬される刀剣類は1～2点の剣または槍が主体であって、前期になって大刀と環頭大刀が新たに登場することは以前から指摘されていた（森・炭田1974、田中1984）。表はそのことを改めて裏づけるとともに、大刀（素環頭大刀）と剣と槍（鉾）がセットをなして古墳に副葬されるのが前期に入ってからであることを明らかにしめしている。さらに、これを見るかぎり、少なくとも東日本では、大刀をふくむ刀剣類のセットでの副葬が前期前葉以降におこなわれたことをしめす結果となっている⁽¹⁴⁾。

副葬鉄製品の構成および特徴 つぎに、表3にあげた古墳の副葬刀剣類の構成に注目したい。そこで明らかなのは、ほぼすべての古墳に1点以上の大刀が副葬されている事実である。大刀は前期において小規模古墳から出土することがほとんどなく、高い階層性をしめす器物である（池淵1993）。ただし、上述のとおり表3の古墳のほとんどは各地を代表する有力古墳とみられるため、このことは当然の結果ともいえるであろう。また、表からは判断できなかつたが、剣と槍を厳密に区別したうえで槍の柄型式（山形、一直線、弧状）ごとの数をカウントする

表3 東日本における4点以上の刀剣類を副葬する前期古墳

古墳名	所在地	墳形	規模(m)	器種・数	備考
会津大塚山古墳南槨	福島県会津若松市	方円	114	三葉環頭大刀1、大刀1、剣5、槍2	
会津大塚山古墳北槨	福島県会津若松市	方円	114	大刀1、剣5	
丸山1号墳	茨城県石岡市	方方	55	大刀3、剣3、槍3	剣・槍未区別
駒形大塚古墳	栃木県那珂川町	方方	61	大刀2、剣1、槍1	
山王寺大伴塚古墳(中心埋葬)	栃木県藤岡町	方方	96	大刀1、剣3	
成塚向山1号墳	群馬県太田市	方	20	剣1、槍3	本書
前橋天神山古墳	群馬県前橋市	方円	126	素環頭大刀1、大刀4、剣12	剣・槍未区別
朝倉2号墳	群馬県前橋市	円	23	大刀1、剣2、槍1	
辺田1号墳	千葉県市原市	円	33	素環頭大刀1、大刀1、剣1、槍2	
手古塚古墳	千葉県木更津市	方円	60	大刀3、剣1	
宝来山古墳	東京都大田区	方円	100	剣5?、槍1	
加瀬白山古墳木炭櫛	神奈川県川崎市幸区	方円	87	大刀3?、剣6	剣・槍未区別
真土大塚山古墳	神奈川県平塚市	-	-	大刀4?	墳形規模不明
阿尾島田A1号墳第1主体部	富山県氷見市	方円	72	剣5、槍1	方墳説あり
国分尼塚1号墳	石川県七尾市	方方	53	大刀1、剣3、槍2	
雨の宮1号墳	石川県中能登町	方方	64	大刀5、剣16	剣・槍未区別
大丸山古墳	山梨県甲府市	方円	120	大刀3、剣9	剣・槍未区別
甲斐銚子塚古墳	山梨県甲府市	方円	169	大刀4、剣3	剣・槍未区別
和田東山3号墳	長野県長野市	方円	46	大刀1、剣2、槍3	
森將軍塚古墳	長野県千曲市	方円	100	大刀2?、剣3?	盗掘有
三池平古墳	静岡市清水区	方円	60	大刀10、剣16	剣・槍未区別
新豊院山2号墳	静岡県磐田市	方円	28	大刀1、剣2、槍3	
松林山古墳	静岡県磐田市	方円	110	大刀1、剣3?、槍9?、鉢	数記載なし

※「墳形」の項目における「方円」は前方後円墳、「方方」は前方後方墳、「方」は方墳、「円」は円墳をしめす。

ことで、さらに意味ある傾向を導き出せる可能性がある。

一方、このなかで確実に大刀が副葬されていないのは、成塚向山1号墳と阿尾島田A1号墳の2基のみである。ただし、阿尾島田A1号墳からは1点の長剣(全長64.8cm)が出土している。前期における長剣は多くが舶載品とみられ、大刀に近い扱いを受けたという指摘は(今尾1990)、現在広く支持されている。したがって、地域を代表する古墳に匹敵する数の刀剣類を保有しながら、そこに大刀(または長剣)がふくまれない本古墳のあり方は、東日本のなかで稀有といってよい。

また、本古墳出土の槍3点がすべて一直線柄縁槍で、山形柄縁槍が1点もふくまれないことも重要で

ある。一直線柄縁槍をややランクの低いものとみた先の想定をふまえれば、このことは本古墳の被葬者が山形柄縁槍入手しえない立場にあったこと、言い換えれば、山形柄縁槍入手しうる立場の人物よりも低い階層的位置にあった可能性を示唆する。大型前方後円墳から基本的に出土することのない長茎短剣が本古墳の刀剣類にふくまれることも、この理解の傍証となろう。

さらに、本古墳のもう一つの特徴として、被破壊鉄器の副葬がある。さきにみたとおり、被破壊鉄器は前方後円墳以外から出土する例が多く、むしろ小規模古墳からの出土が主体となっている。そして、表にあげた古墳のうち被破壊鉄器が出土した古墳は、本古墳のほか駒形大塚古墳と阿尾島田A1号

墳の計3基にすぎない。したがって、現状では被破壊鉄器の識別が十分おこなわれていないという問題もあるが、3～4点以上の刀剣類が副葬される古墳から被破壊鉄器が出土することが少ないという傾向は指摘してよいであろう。その意味で、両者をともなう数少ない古墳の一つである本古墳は、上と同様に汎列島規模でみても希少な存在ということができる。

小 結 副葬鉄製品からみた成塚向山1号墳の位置をまとめると、つぎのとおりである。刀剣類においては、地域最上位の保有数を誇る一方で、上位の古墳からほぼ必ず出土する大刀または長剣をもたず、さらに、ややランクの低い古墳にともなう剣と槍のみで占められるという顕著な特徴をみせる。工具においては、西日本的一部の小規模古墳にみられる折り曲げ鉄器（鎧）を副葬し、これにかんする古墳の諸属性も西日本の古墳の傾向に合致する。また、まとまった数の刀剣類と被破壊鉄器が共存する数少ない古墳の一つでもある。

このような特徴をふまえると、本古墳の被葬者として、東毛地域有数の勢力や武力を有する一方で、最上位にあったとはみなしくい人物の姿が浮かび上がる。したがって、ここから逆に、本古墳と寺山古墳がほぼ同時期の築造であって、寺山古墳の被葬者を東毛地域の最高エリートの一人と推測することも不可能ではない。一方で、本古墳の被葬者を寺山古墳の一代前もしくは一代後の東毛地域のリーダーの一人ととらえつつ、何らかの事情により前方後円（方）墳を築きえなかつたとみる理解も、なお成立の余地は残る。

前者の理解のばあいの問題は、その刀剣類保有数や西日本と共に通する鉄器折り曲げ（破断）儀礼の採用から、本古墳の被葬者をたんに地域のナンバー2的な人物とみなすのみでは不適当と考えられることである。すなわち、寺山古墳の被葬者が近隣地域の最上位者としての位置にあるものの、本古墳の被葬者はたんに寺山古墳被葬者の支配下にあった人物ではなく、一定の勢力を保持したうえで政治や軍事等

の重要な職掌を担い、そのことが、小規模古墳には異例の副葬品構成として表れたと考えるべきであろう⁽¹⁵⁾。さらにこの人物は、西日本でおこなわれている最新の葬送儀礼につうじているという側面をもつことは重要であり、このことは、後者の理解をとるばあいでも共通する。

後者の理解のばあいは、なぜ東毛最高位のリーダーの墓に、不可欠の武器といえる大刀が副葬されないのであるかという問題が依然として残る。これにたいして、下野や西毛あるいは武藏の一部をくわえたより広域の地域圏を想定し、そのなかの上位（最上位でなく）にある人物に本古墳の被葬者をあてることで整合性をたもつという理解がありえよう⁽¹⁶⁾。ただし、この枠組みを考古学的に証明することは容易でなく、なおかつこれに迫るために、東毛のみならず関東・東日本の前期古墳の総体的な把握が必要となり、小論の目的を大きく超える。したがって、現在のところは、東毛地域を超える地域圏という視点から本古墳の被葬者を性格づけることが決して不可能でないことを指摘するのにとどめたい。

上記二つの理解については、出土遺物の階層的位置という観点から前者の成立の可能性が高いと考えているが、その差は決定的とまではいいがたい。また、これ以外の理解が成立する可能性も否定できないことから、現状でこれ以上の推論の積み重ねは控えたいと思う。いずれにしても本古墳出土の鉄製品は、被葬者の権力の大きさと、一方においてその特殊な性格を如実にしめすものといえる。このように、鏡や腕輪形石製品などのいわゆる威信財だけでなく、それらの範疇にふくまれることの少ない鉄製品の検討からも、古墳被葬者の性格に迫ることが十分可能であることを強調しつつ、小考を閉じることしたい。

3 成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳

註

- (1) ここで述べた中期開始の指標は、典型的かつ容易に視認できる例としてあげたにすぎず、ほかに、刀剣類、鉄鎌・銅鎌、石製模造品等の複数の考古資料において把握が可能と考えている。
- (2) 報告書154頁の図103-i15がそれに該当する。報告書中では剣として記述されているが、実物を観察した結果、柄縁が一直線上で身の部分に位置し4枚合わせ技法が確認されたことから、槍と判断した。なお、実見にあたっては、神戸市教育委員会の安田滋氏と中村大介氏にご配慮をいただいた。
- (3) 直接言及はないが、森下章司の副葬品の組み合わせにもとづく前期古墳の編年によれば（森下2005）、前橋天神山古墳はその2番目の組み合わせに該当すると思われ、前期前半の内容をしめしている。
- (4) 関東の前期古墳で認められる折り曲げ鉄器は、これまで千葉県木更津市鳥越古墳の剣（槍）1例のみであった（長谷川2001）。
- (5) 表2の項目名および表示方法は清家章によるものにはば順じた（清家2002:4-7頁）。なお、今回検索したのは前期古墳のみである。清家は、折り曲げ鉄器を字義通り折り曲げられたものにはば限定して集成しており、破断品をふくませたここでの基準とは異なる。一方、ここであげた事例のほとんどは意図的な破壊とは認識されておらず、報告書の挿図、写真および記述からその可能性が高いと判断したものである。ただし、筆者未見の資料が大半を占めているため、意図的な破損品でないものがふくまれる可能性は否定できない。
- (6) このばあい、折り取られた部分が同一遺構内から出土した例はほとんどない。
- (7) 槍が所有者の階層性を反映する器物として登場したとする理解は、早くに田中新史と寺沢知子によってしめされている（田中1991、寺沢1990）。
- (8) この理解は、少数存在する柄縁がゆるやかな弧状を呈する槍にたいしても該当すると考えている。そして、時期が降るにつれ山形柄縁槍でも鈍角的な形状の柄縁をもつものが増加していく現象の理由は、一直線柄縁から山形に削り出す工程の省略化（手抜き）の過程に起因する可能性が高い。
- (9) ここではなしえなかつたが、古墳規模と両者の副葬数等の数的関係を処理すれば、両者の階層差が明確になる可能性があると考えている。
- (10) 周知のとおり、高井田山古墳は百済系とみられる初期の横穴式石室を採用し、倭ではきわめて稀な青銅製熨斗が副葬されるなど、百済と密接な関連を有する人物が葬られたとみられる古墳である。
- (11) ここであげた古墳の多くは地域最大規模でなく、中程度の規模の円墳または前方後円墳である。小論の趣旨からははずれるが、鉄装槍はきわめて規格性が強く、近畿中央部を中心とする地域で集中的に生産がおこなわれたとみられる器物であり、このような古墳に甲冑1組とともに鉄装槍が1～2点副葬されることは、中期後半における倭政権と地域権力との関係や当該地域の政治構造を検討するうえで重要な鍵になると考えている。
- (12) ただし、鉄装槍については、身が鉄鎌を模倣したものとする意見があり（池淵2003:170頁）、聞くべき考え方と思われる。したがって、鉄装槍はたんに中期前半までの槍を鉄装に換えたものではなく、倭の伝統的武装と朝鮮半島からの新來の武装との融合により成立したと理解するのが適当と考えている。
- (13) ここでいう東日本とは、太平洋側では静岡県以東、日本海側では能登半島以東としている。この区分は必ずしも便宜的ではなく、該期の土器様式や住居構造などの要素からも区分されるものである。
- (14) 村上恭通は、古墳に副葬される鉄製武器に画一的様相がうかがえるのは「前方後円墳成立期」でなく、「椿井大塚山古墳段

階」以降とする（村上1999:80頁）。前後の文脈から判断するかぎり、「前方後円墳成立期」とは前期初頭を指すとみてよく、小論との関連からも傾聴すべき指摘である。ただし、生産地の問題は措くとしても、各種副葬刀剣類のセット関係の成立が前期初頭にさかのぼるか否かについては、前期初頭の大型古墳調査例がなお少ない現在、その可能性は決して小さくないと考えている。

- (15) この想定にたいして示唆的なのは、前期の大型古墳の多くにみられる複数の埋葬施設や、大型前方後円（方）墳に近接する同時期の中～小規模円墳・方墳の存在である。それぞれの関係はほとんど検討されていないが、たんに夫婦または肉親の埋葬と断定できるだけの情報は蓄積されておらず、「政祭分離」や地域の政治社会構造といったさまざまな観点から、この問題に取り組む必要があろう。
- (16) 田中新史は、東日本の前期から中期前半における130m級以上の前方後円墳を「東国を代表する広域的存在物」と位置づける（田中2002:415～416頁）。その正否は容易に判断できないものの、こういった視点に立つことで、本古墳の特異性の理由を比較的整合的に説明できる可能性がある。

引用文献

- ・池淵俊一 1993 「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として」『古代文化研究』第1号 島根県古代文化センター 41-104頁
- ・池淵俊一 2003 「刀劍・矛・戈・ヤリ・素環頭大刀」『考古資料大観』第7巻 小学館 167-172頁
- ・今尾文昭 1990 「鉄刀と鉄長剣」『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第6冊 同志社大学文学部文化学科 108-110頁
- ・菊地芳郎 1996 「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会 49-81頁
- ・清家章 2002 「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『待兼山論叢』第36号史学篇 大阪大学大学院文学研究科 1-24頁
- ・高田貫太 1998 「古墳副葬鉄鎌の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会 49-70頁
- ・田中謙 2006 「瀬戸内における折り曲げ鉄器副葬と地域間関係」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会 525-534頁
- ・田中新史 1977 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会 1-21頁
- ・田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号 早稲田大学考古学会 1-53頁
- ・田中新史 1991 「神門三・四・五号墳と古墳の出現」『邪馬台国時代の東日本』六興出版 130-136頁
- ・田中新史 2002 「有段口縁壺の成立と展開」『土筆』第6号 土筆舎 365-428頁
- ・寺沢知子 1990 「鉄製ヤリ」『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第6冊 同志社大学文学部文化学科 112-115頁
- ・豊島直博 2003 「ヤリの出現」『古代武器研究』4 古代武器研究会 61-68頁
- ・橋本達也 2005 「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室 539-556頁
- ・長谷川達 2001 「剣を折る・鏡を割る」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会 109-120頁
- ・村上恭通 1999 「鉄製武器形副葬品の成立とその背景」『先史学・考古学論究』III 龍田考古学会 59-85頁
- ・森浩一・炭田知子 1974 「考古学からみた鉄」『日本古代文化の探求・鉄』社会思想社 11-84頁
- ・森下章司 2005 「前期古墳副葬品の組み合わせ」『考古学雑誌』第89巻第1号 日本考古学会 1-31頁

第9章 考察

【古墳文献】(北から)

大塚森／辻秀人ほか 2005『古墳時代前期における北端の古墳文化の研究』東北学院大学文学部、会津大塚山／伊東信雄・伊藤玄三 1964『会津大塚山古墳』会津若松史別巻 会津若松市、藤原妃敏・菊地芳郎編 1994『会津大塚山古墳の時代』福島県立博物館、丸山1号／後藤守一 1957『常陸丸山古墳』山岡書房、原1号／茂木雅博ほか 1976『常陸浮島古墳群』浮島研究会、狐塚(茨城)／西宮一男 1969『常陸孤塚』、駒形大塚／三木文雄編 1986『那須駒形大塚』吉川弘文館、八幡塚／三木文雄・村井富雄 1957『那須八幡塚』吉川弘文館、山王寺大伴塚／前澤輝政 1977『山王寺大伴塚古墳』早稲田大学出版部、寺山／梅沢重昭『寺山古墳』『群馬県史』資料編3 群馬県 968-969頁、朝倉2号／山本良知 1981『朝倉2号墳』『群馬県史』資料編3 群馬県 39-48頁、前橋天神山／松島栄治 1981『前橋天神山古墳』『群馬県史』資料編3 群馬県 48-58頁、御幸田山A1／大塚昌彦ほか 1987『御幸田山遺跡』渋川市教育委員会、片山1号／茂木由行・橋本博文 2004『片山遺跡群発掘調査報告書』吉井町教育委員会、北ノ作1号／金子浩昌・中村恵次・市毛勲 1959『千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査』『古代』第33号 早稲田大学考古学会 23-39頁、糸川道行 1993『沼南町北ノ作1・2号墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会、神門／田中新史 1977・1984、辻田1号／田中新史 2002・木對和紀 2004『市原市辻田古墳群・御林跡遺跡』市原市文化財センター調査報告書第89集(財) 市原市文化財センター、鳥越／杉山林継 1980「木更津市鳥越古墳の調査」『考古学ジャーナル』No.171 ニューサイエンス社 18-19頁、高部／西原崇浩 2002『高部古墳群I』千束台遺跡群発掘調査報告書VI 木更津市教育委員会、手古塚／杉山晋作 1973『千葉県木更津市手古塚古墳の調査速報』『古代』第56号 早稲田大学考古学会 30-33頁、八重原1号／杉山晋作・田中新史 1989『古墳時代研究』III 古墳時代研究会、野毛大塚／寺田良喜・三浦淑子編 1999『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会、宝来山／穴沢啄光・西岡秀雄 1981「田園調布宝来山古墳の研究」『史誌』15号 大田区史編纂室 1-59頁、加瀬白山／柴田常恵・森貞成 1953『日吉加瀬古墳』三田史学会、阿尾島田A1／高橋浩二ほか 2007『阿尾島田古墳群の研究』富山大学人文学部、国分尼塚1号／和田晴吾 1984『石川県国分尼塚一・二号墳』『月刊文化財』254号 第一法規出版 11-17頁、雨の宮1号／中屋克彦ほか 2005『史跡雨の宮古墳群』鹿西町教育委員会、狐塚(石川)／後藤守一 1937『加賀国江沼郡勅使村字二子塚所在狐塚古墳』『古墳発掘品調査報告』帝室博物館 44-66頁、大丸山／赤岡・土屋・仁科「大丸山古墳」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯 山梨県 52-77頁、甲斐斐子塚／森原明廣・森屋文子 2005『国指定史跡斐子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第228集 山梨県教育委員会、和田東山3号／明治大学和田東山古墳群発掘調査団 1995『和田東山古墳群』、高遠山／片桐千亜紀ほか 2000『高遠山古墳発掘調査概報』中野市教育委員会、森将軍塚／岩崎卓也ほか 1973『長野県森将軍塚古墳』東京教育大学文学部考古学研究報告III 東京教育大学文学部、三池平／内藤晃・大塚初重編 1961『三池平古墳』庵原村教育委員会、新豊院山2号／佐口節司ほか『新豊院山遺跡発掘調査報告書III 新豊院山古墳群』磐田市教育委員会、松林山／後藤守一・内藤政光・高橋勇 1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』静岡県磐田郡御厨村郷土教育研究会、雪野山／福永伸哉・杉井健編 1996『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会、豊中大塚／柳本照男ほか 1987『摂津豊中大塚古墳』豊中市文化財調査報告第20集 豊中市教育委員会、高井田山／安村俊史・桑野一幸 1996『高井田山古墳』柏原市文化財概報 1995-1 柏原市教育委員会、西求女塚／安田滋編 2004『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会、メスリ山／伊達宗泰編 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 奈良県教育委員会、後出／西藤清秀ほか 2003『後出古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第61冊 奈良県教育委員会、天狗山／松木武彦 2001『天狗山古墳・天狗山西古墳の発掘調査』『吉備地域における「雄

略朝』期』の考古学的研究』岡山大学文学部 2-27頁、中出勝負峰8号／佐々木直彦編 1986『歳ノ神遺跡群 中出勝負峰墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集(財) 広島県埋蔵文化財調査センター、美和32号／山田真宏編 1994『美和古墳群発掘調査報告書』(財) 鳥取市教育福祉振興会、川上／花谷浩ほか 1991『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会、一貴山銚子塚／小林行雄 1952『福岡県糸島郡一貴山村銚子塚古墳の研究』日本考古学協会古墳調査特別委員会

挿図出典 (いずれも一部改変)

- ・図1…1. (佐々木編 1986) 第112図-40、2. (西原 2002) 第19図-2a
- ・図2 (前澤 1977) 第18図・第19図
- ・図3 1～3. (寺田・三浦編 1999) 第129図-18～20、4～6. (柳本ほか 1987) 第99図
- ・図4 1. (寺田・三浦編 1999) 第153図、2・3. (安村・桑野 1996) 図-64-3・4
- ・図5 1. (杉山・田中 1989) 図16-1、2. (西藤ほか 2003) 図38-2、3. (花谷ほか 1991) 第11図-3